月の椅子

ヒロシ

　風の音で目を覚まし、何も考えず携帯電話のディスプレイを見た。
午前１：３２
眠りについたのは２３時頃だっただろうか。不眠症を患っている僕だが心地よい眠気を久しぶりに感じ、誘われるままに目を閉じた。いつも服用していた睡眠導入剤も必要なく、朝まで眠れそうな気がした。故に眠りから覚めたとき少なからず落胆した。こうなってしまうと中々眠れない。薬を飲もうかと思ったがこの時間に飲むと明日の朝ー正確には今日の朝だがー体がだるくなって仕事に支障が出る。寝坊こそしたことは無いが重い体を無理矢理引きずって職場に行き、薬が抜けるまで半日ほど碌に仕事ができずに過ごした事は何度かある。
　仕方なく目を閉じて轟々と止まぬ風音を聞いていた。物置小屋のトタン屋根がバタバタと鳴っている。相変わらず煩い屋根だ。強風の度にそう思うのだが直そうとは思わない。しかしいつかは直さねば。ならば今度の休日にでもやるか。そういう日に限って天気が悪かったりするんだよな・・・などと色々考えているうちに軽い眠気がやってきた。
　あぁ何とか眠れそうだな…と思ったその時、「バーン！！！！！」と大きな音が外の方で鳴り響いた。
何事かと窓を開けてみるが灯りの無い庭は真っ暗でよく見えない。懐中電灯を手にし玄関を開けて外に出た。冷たい液体が頬を打つ。外に出て初めて雨が降っていることに気が付いた。懐中電灯の灯を頼りに庭先を見ていたのだが、突如灯が消えてしまった。電池が切れたようだ。雨に濡れるのは嫌だし、特に何も無さそうだった。軽い舌打ちをして家の中に戻った。

再び布団に潜り込む。
しばらく目を閉じてみたものの眠気は遠ざかっていた。携帯電話をみると午前３時を過ぎていた。
仕事の都合上、朝は５時には起きないといけないので今から眠れても２時間しかない。
深いため息をつき、とりあえず目を閉じた。

真っ暗。
真っ暗。
真っ暗な世界の周囲が歪み始める。
ふと現れては消える影。
あれは小学の同級生だ。
ふわりと浮かんだ緑色。
一瞬平原を映して闇に還る。

　教室にいた。
机の前で椅子を持ち上げ天井に向かって放り投げた。その瞬間天井が消え去り綺麗な青空が広がった。椅子は重力を無視するかのようにどこまでも飛んでいった。やがて椅子が小さな点になるほど遠ざかった時、空にぶつかった。

空が少し欠けて隙間から月が見えた。満月だ。それを見て僕は安心した。満月じゃないと大変なことになるから。

欠けた空の淵は形をなんとか維持していたが徐々にひび割れてきた。昼から夜になろうとしているのだとわかった。ひびは徐々に広がり、バリバリと青空が落ちた。青空の欠片は風に流されるように空中を漂いやがて細かな粒子になって消えていった。そして完全な星空になろうとしたとき月が近づいてきた。迫ってくる月は柔らかな光を放っていた。さっき放り投げた椅子は月に辿り着いたようで予定通り月は欠け始めた。

僕は机の上に乗って鞄から筆箱を取り出しボールペンをカチャカチャとノックした。机が飛び立った。やや不安定ではあるが月まで行くには十分だ。月はいつの間にか半分になっていた。暗いところに着いてはいけない。父にそう教えられたので明るい所を目指して飛んだ。月に近づくに従い、半分だった月はどんどん欠けていた。やがて線のように細くなった月に降り立とうしたとき、闇に引き込まれるように月の線が消えた。

そして僕は雑貨屋さんに来た。

商品が陳列されている棚に地球儀を見つけた。昔父に買ってもらった地球儀と同じくらいの大きさで触ってみると懐かしい感じがした。地球儀の横に月の形をしたオブジェがあった。地球儀のように回せるようになっていて何度か回していると徐々に月が欠けていくという不思議な物だった。じっくりとそのボコボコした表面を見るとクレーターの横に小さな小さな椅子があった。

安堵感が全身を包んだ。あの椅子はしっかりと月に辿り着いた。僕は失敗したけど今度は違う机で飛んでみよう。新しいボールペンを買って店から出た。

風が強い。今日は太陽が欠けている。